

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

創刊号

編集) 1981・8・31
発行) 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 田中寿義雄
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町 中部字田ノ平乙一
3100-1
電話 09554-3-3681
印刷所 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市大字納富分
2919-3



いろ え ば い か おもだかもんびん
色絵梅花沢瀉文瓶

館蔵資料

古伊万里様式・有田皿山
江戸前期 (17世紀中葉)
口径 3.6cm、胴径14.8cm
高さ27.6cm、高台径10.0cm

赤の線描に黄と緑の梅花を散らした地文、沈んだ赤のゆらめく沢瀉を主文として配したこの瓶は、以前は古九谷に分類されていたものだが、類似の地文に「1671」(寛文11年)銘銀蓋付の水注が大英博物館で展示されて以来、有田皿山寛文期の輸出色絵磁器の一群として一般に認められるようになった。

「セラミック九州」の 創刊について



館長 田中寿義雄

去年の11月1日開館以来、九州陶磁文化館はまずまず順調な歩みを続けている。

有田町をはじめ県内外の各界各層からの協力と期待に支えられて完成した当館も、目下人間にたとえれば嬰兒のごときものである。形はできたものの内容の充実はずべてこれからである。

今日も階下のアトリエでは陶芸教室が開かれ、江口勝美講師の指導で20人の老若男女の受講生たちが「やきもの」作りに汗を流している。これも当館の教育普及活動のひとつである。

午前中には俳優の川津祐介さんが陶芸家の佐藤走波さんと一緒に見えたが、当館三室の展示品を見てかなりの刺激を受けたようである。川津さんはやきものが好きで、自分でも作品を作ることに熱中し、以前から佐藤走波さんの窯にやって来ては仕事をしていらしい。

改めてゆっくり一日をかけて当館を訪ねたいと云い残して帰って行った。

当館は九州圏域の拠点の陶芸文化施設として構想され建築された。したがって、展示品の収集についても九州全域の各窯の製品を歴史的、体系的に集めることが要請されている。

しかし、展示資料を一挙に集めることはまず不可能である。私たちは全館の知恵をしばって着実に、それこそ一步一步目標に近づけるよう努力を重ねる必要がある。それには時間もかかるし、館員の勉強も要求される。

資料の寄贈、寄託も含めた収集が累積してはじめて層の厚い、選抜かれた展示活動が多数の陶磁鑑賞者を持続的に魅きつけることになるのである。

当館は資料の収集展示に当って、単に古いものを集めるだけでなく、現代の陶磁作品の収集についても積極的な関心を持っている。つまり、陶磁文化に関して

は過去、現在の歴史的流れを明らかにすることによって、未来はいかにあるべきかを「暗示」し得る展示活動をめざしたいのである。

幸い開館以来8カ月を経て、北は北海道、東北地方から南は沖縄まで日本各地から来館者を迎えている。陶磁研究の専門家はもちろんであるが、当館にいと日本人とやきものの結びつきの深さを改めて痛感する機会が多い。

固定展示室の図表、年表、解説等を熱心にメモする人たち、やきものの製作過程を示すビデオを喰い入るように見つめる人たち、陶片の一片一片に視線を注いで動かない人たち、華麗な輸出伊万里を集めた蒲原コレクションに嘆声をあげる人たちを見ると、私たちは、この人たちのためにいいやきものを収集し展示しなければならないという思いを新たにしている。

当館は55年度は開館準備のために全力をあげたため、開館初年度は記念展と1、2の個展以外はめぼしい事業を実施する余力がなかった。

したがって、本年度からはじめて通常の館活動がはじめられたと云ってよい。

館報を創刊するのもその一環である。館報名を「セラミック九州」としたのは、当館が九州圏域における唯一の陶磁文化施設であることに由来している。

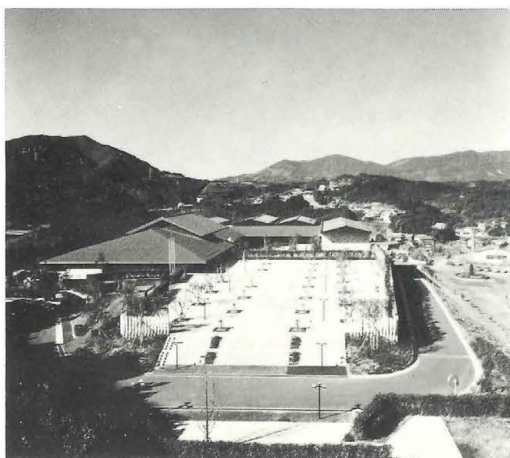
この館報を通じて私たちは当館の活動をつぶさに報告し、周知させていただくつもりである。ささやかな誌面ではあるが関係者の方々のお役に立つよう充実した編集を心がけねばならないと考えている。

さて、いま九州陶磁文化館の田の平台上は夏の暑い陽射しがさんさんとふりそそいでいる。台地を圍繞する周辺の山々も、長い梅雨期を終って日毎に緑を濃くしている。来館者の皆さんはひとしく当館をめぐる環境の豊かさを賞めて下さるが、建物の美しさも印象に残るようである。ある外国人研究者は当館の建物の印象を「ハンサムですね」と云ったが、私たち館員はその「ハンサム」な文化施設に職を奉じ得たことを誇りにし幸福に思っている。

これから長い歳月をかけて私たちは当館を名実ともに「九州陶磁文化館」の名に恥じない立派な文化施設として育てあげねばならないと決意している。そのためには、当館は多くの人のびとに親しみ、愛される陶磁文化のセンターでなければならない。これからも、いっそうの御支援をお願いして「セラミック九州」創刊の辞とする。

九州陶磁文化館の現況

本館は、九州の陶磁器に関する歴史的・美術的・産業的にみて重要な資料を①収集・保存・展示するとともに、②調査研究、③教育普及の活動を行うことにより、文化遺産の保護と陶芸文化の発展に寄与することを目指して設立された広域文化施設です。



九州陶磁文化館の全景

まず、資料収集活動の対象は、九州各地の陶磁器、その源流である中国・朝鮮の陶磁、道具・文献資料等。購入あるいは寄贈・寄託によって収集します。7名の専門委員の協議をまって購入資料が決められます。現在まで購入できたのは118点しかありません。限りある年度予算では購入資料の急速な充実は当分望み難いようです。したがって、現在10件の寄贈、蒲原コレクションを含む寄託105点、準寄託191点がありますが、今後むしろこうした資料をふやさねば、と考えています。

展示活動の場としては4つの展示室が設けられています。そのうち固定展示室は、九州陶磁の歴史的な流れが、実物あるいは図表・年表・写真などによって構成されています。その名のとおり余程のことがない限り、その内容は変えられません（詳細後に紹介）。他の3展示室（常設・企画・一般）は、館蔵資料・寄贈寄託資料による常設的展示（古陶磁）、現代九州の作家の作品展示、それに随時個人的もしくは団体的な陶芸展を組み込んで展示構成がなされています。

調査研究活動は、九州の陶芸ないし陶磁産業を歴史

的・総合的に明らかにする為に、考古学・美術工芸史など色々な分野に亘る資料・文献の収集調査に努めます。現在、佐賀県や有田町・西有田町などに収蔵されている莫大な量の古窯出土陶片資料の整理分析に取組んでいます。息の長い仕事になりそうです。また九州各地の美術館・博物館・資料館に所蔵されている資料、さらには個人蒐集家に対しても漸次調査の手を伸ばしてゆくつもりです。

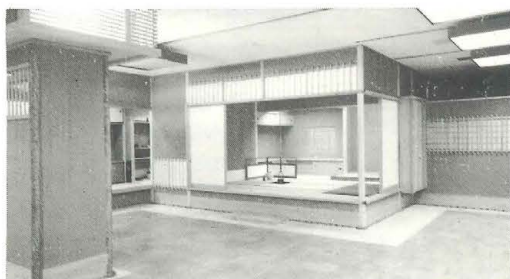
陶芸実習室（1階の窯室・絵付室など）を利用した陶芸教室、2階の研修室等における陶芸文化講座など、教育普及活動も本館の活動領域としてきわめて重要です。第1期の陶芸教室は、県内各地から20名の受講者を集めて、去る7月4日から10回の予定（毎土曜）で既に始められています。

学芸員室の隣に図書室を設けております。気軽に利用いただきたいのですが、これも内容充実にはまだ時間を要しそうです。

なお、来る9月27日には茶室開き、県の茶道連盟の皆様の手で行われます。

メモ台付きの246シートをもつ階段式講堂は、講演会・研究会などに使用され、16ミリ・スライドの映写もできます。去る5月31日にDDRの元首E. Honecker閣下を迎えての名誉有田町民章贈呈式もこの講堂で行われました。ことし11月末の有田町の町並保存シンポジウムの主会場にも予定されています。ふだんは団体観覧者に対するガイダンスの為に利用しています。

なお、1階には、陶芸教室関係のほかに、写真室・修理工作室（陶片整理）・実験室などが並び、いちばん奥に資料収蔵庫が大小4室あります。同規模の小収蔵庫3室は、それぞれ寄託資料・道具文献資料・企画展示資料の収蔵にあてられ、内壁にはトガ材が用いら



茶室（一般展示室に併設）

れています。大収蔵庫は床面積が約530㎡あって、しかも天井が高く、将来収蔵棚を2階建にすれば収蔵能力は倍加されます。専門的研究のため特別に注文してできた頑丈な陶片資料ケースが20基、この大収蔵庫に置かれ、内容充実のときを待っているところです。

以上、本館の収蔵・展示・研究・教育施設のごくあらましを紹介しました。



蒲原コレクション（固定展示室）

さて、本館の展示活動は常設と特別（企画）の2形態に大別されます。ことしはじめて会場となりました九州山口陶磁展美術部門には企画・一般の2展示室を開放しましたし、先頃の現代工芸肥前支部展には一般展示室だけで済みました。今秋の「世界の現代陶芸展」には固定展示室を除く3展示室すべてを会場とします。このような特別展観の規模によって伸縮するのが常設展（九州の陶磁—古陶磁・現代九州陶芸）ですが、何時の場合でも不動なのが固定展示——その名の示すとおりです。

以下、固定展示の構成を紹介します。判りやすく九州陶磁の歴史的展開を構成したつもりですが……。それは、つぎの10項目に分れています。

1. 器の基本形 皿・鉢・甕・壺・瓶の区分基準を、ひらものからふくろものへ、口径と高さの比率などによって図示。

2. 器の分類 土器・陶器・炔器および磁器のちがひ。材質や焼くときの条件を比較。

3. 中国・朝鮮の陶磁 中国及び朝鮮の陶磁器の系譜と窠跡を図示し、日本の陶磁器のルーツを探る。また、如何に多く中国・朝鮮のやきものが舶載され、かつ模倣されたかの問題は図表により対比、県内出土陶磁器を出品。

4. 日本の陶磁 主として中世日本の陶器の系譜と地域的展開。中世の国産陶器の出土分布の5枚のパネルに注目したい——九州陶磁に先行した瀬戸・美濃・備前など。

5. 九州陶磁の展開 まず北九州から沖縄に至る32の古窯（群）の位置を地図上の豆ランプで知ると同時に、各窯の作品3点ずつをスライドで紹介。このあと、唐津焼をはじめ九州各地の陶器、上野・高取・肥後・薩摩・琉球の創始と展開を図示。文と絵による解説も。続いて有田泉山の発見以後おこる陶器か

ら磁器への急転換。

つぎに九州の磁器。天狗谷に見られる様な創業期の肥前磁器（初期伊万里）は、色絵技法を加えて古伊万里様式を完成させてゆく。17世紀なかば過ぎ、天草陶石が発見された。

6. 肥前磁器の国内流通 経済史の視点から伊万里津の位置を重視。

7. 古伊万里とオランダ貿易 出島とアムステルダムを結ぶ太いセラミックルートの世界地図上に示す。古伊万里—オランダ貿易年表、輸出統計グラフ、宮殿磁器の間、ドレスデン美術館収蔵庫、出版版画等も。

8. 蒲原コレクション 蒲原^{はかる}権氏によって里帰りが叶った輸出伊万里の逸品は、見る人を驚倒賛嘆させるものがある。

9. 近代の九州陶磁 江戸から明治へ、島津藩と鍋島藩は西洋科学の摂取に努め、やきものに関しても新しい技術導入を試みた。また、ロンドン・パリなどの万国博を通じて輸出産業としても重視される。明治の陶磁器の巨器を2点、香蘭社製造。此处には技術の変遷、製品の変遷も図示される。

10. 陶片展示（鍋島藩窯、青磁、土ものの陶片を見せる）

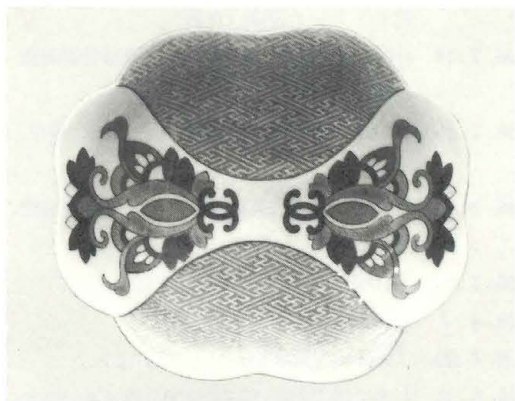
おしまいに、肥前陶磁器の製作工程が、実物模型型と解説により掲げられ、VTRの動く映像によって理解を促す仕組。いま、固定展示室の案内書を準備中、9月末刊行予定。

今秋の企画「世界の現代陶芸」展の準備は着々すすんでいます。もう、来年度の事業計画、とくに企画展の立案検討に取り掛かねばなりません。開館して半歳余、平年化した本館運営の基礎固めはこれからです。

シリーズ やきものに見る文様 (1)

紗綾形文様

まんじ 卍つなぎの一種で、卍を斜めに連らねた連続文様。紗綾の織り、すなわち地が平組織で、文様が縦の四枚綾の絹織物に多く用いられるところから名づけられる。この系統の文様は名物裂に多くみられ、おそらく明時代の中国から伝わったものであろう。日本では桃山時



色鍋島紗綾形唐花文向付

代頃からの文様に多く用いられ、ことに江戸時代にはりんす 綸子の地文はほとんどが紗綾形で、これに菊・蘭などをあしらったものが紗綾形綸子として非常に多く行われた。染物の地文様、建築の装飾などにも用いられ、鍋島藩窯の作品にも多くとりいれられている。あらかじめ墨で器面に紗綾形文様を丁寧に描き、その上から呉須を濃み筆で塗りこめると墨の上の呉須ははじきとぶ。それを 800℃位で焼くと墨はカーボンとなってとんでいき、墨で描いた紗綾形文様は白くぬける。墨はちょうど、ろうけつ染めにおけるロウの役割りを果たしている。この技法を墨弾きの技法といひ、鍋島藩窯の独特の技法の一つとして知られる。

シリーズ やきもの小辞典 (1)

印版——コンニャク版

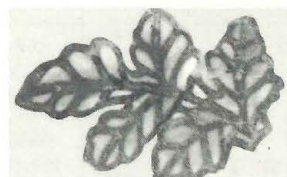
陶磁器の絵付けには筆で直接行うものと、版や型紙を用いて間接的に行う絵付け（印版）がある。後者の印版による絵付け法は複雑な文様を大量に、低価格に生産できるようにしたものである。この量産のために



染付印版手菊文皿

生みだされた技法にスポットをあて、今回からシリーズでとりあげてみたい。

最初に紹介するのは、いわゆるコン



同上部分拡大写真

ニャク版である。この技法がいつごろからどのようにして行われたものか、今のところ正確には判っていない。ただ古窯跡においては、長崎県長与町長与窯や波佐見町百貫西窯・長田山窯・皿山本登窯、さらに佐賀県有田町無患子谷窯、山内町筒江窯や伊万里市市の瀬窯などで確認されている。器種は碗類が多く、外側に団鶴・菊・桐などの文様が施されている。ほかには猪口の外側に蝶文とか、皿の見込みに五弁花文などを押捺した例がある。こうしたコンニャク版は、京都大学構内遺跡や東京都動坂遺跡などから出土しており、流通範囲は広く量的にも多く生産されたと考えられる。その生産年代は江戸中期から江戸後期（18世紀～19世紀）と思われる。また肥前地区以外の産地において、コンニャク版による製品を焼成した例が見当たらないことも注目される。

写真の染付中皿は当館の新資料で、葉状文の部分がコンニャク版である。周辺の丸い菊文は手描きによってダミの濃淡をつけてあるが、コンニャク版の方はずっと淡くみえる。コンニャク版の材質がもし名前のとおりコンニャクを利用したものであれば、水分を含んでいるために呉須が薄められ、またやわらかいので押しつけたときに、本来の文様以外の部分にまで呉須がはみだし、あたかも淡いダミを施したかのような効果が生まれたのではあるまいか。技法的には簡単で能率的であると思われるコンニャク版も、江戸時代の終わりには姿を消した。

入館者数 (55.11.1～56.6.30)

()内数字は開館
記念展入館者数

区 分	人 数	利用率	左 の 内 訳	人 数
個 人	22,685人 44,593 (18,475)	52.4% 57.1	小・中学生 高校・学生 一 般	1,993 889 41,711
団 体	17,062 19,385 (4,872)	44.5 24.8	小・中学生 高校・学生 一 般	2,133 1,825 1,171 16,389
その他	2,982 14,164 (7,560)	7.1 18.1	特別入館者	2,982 14,164
合 計	42,129 78,142 (32,907)	100.0 100.0	計	42,129 78,142

陶磁資料寄贈者芳名

(敬称略) (55.4.1～56.7.31)

九州陶磁文化館へ資料をご寄贈くださいますようお願い申し上げます。資料台帳に芳名を記し、永く保存いたします。今後とも、なお一層のご協力をお願い申し上げます。

井村 幸裕 京 都 府 古伊万里染錦七福神文三足壺
1対、同染錦四君子文筒形瓶1点

添田 和信 福 岡 県 白釉壺1点

古館 鴻輔 唐 津 市 古唐津陶片62片

角 功博 長 崎 県 染付唐草鳥獸文皿1点

賀川 光夫 大 分 県 染付蔓文瓶1点

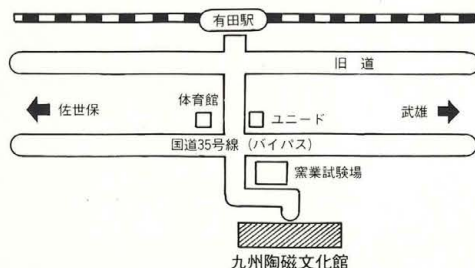
古館 均一 東 京 都 古唐津陶片 900片

小橋 一朗 埼 玉 県 染付鳳凰寿字文皿1点

Kenneth Beittel U.S.A 壺：冬の松 (Snow Pine Jar) 1点

山口 吉彦 伊万里市 陶磁器一括22点

武富 敏夫 伊万里市 陶磁器一括20点



日誌より

- 55.11.1 九州陶磁文化館開館記念式典
- 55.11.2 一般入館者観覧初日「九州陶磁展」-その展開と継承
- 55.12.7 開館記念展終了、観覧者数延32,907名におよび、予想を上回る盛況
- 55.12.9 常設展始まる
- 56.1.10 「ケネス・バイテル作陶展」(～2.8迄)
- 56.1.31 『やきものにみる龍のはなし』福岡市朝日文化センターで講演 (吉永)
- 56.2.14 沖縄県八重山郡西表島の成屋遺跡発掘調査に協力 (～2.26迄、大橋)
- 56.2.25 愛知・大阪方面資料調査 (～2.28迄、前山、吉永)
- 56.3.9 熊本・天草方面資料調査 (～3.12迄、大橋、鈴田)
- 56.3.20 「日本画巨匠展」(～4.5迄)
- 56.4.3 有田町の陶片整理開始
- 56.4.29 「九州山口陶磁展」(～5.17迄)
- 56.5.31 ドイツ民主共和国国家評議会議長エーリヒ・ホネカー閣下ご来駕
- 56.6.16 「現代工芸作陶展」(～6.28迄)
- 56.7.4 陶芸教室始まる (講師：江口勝美氏)
- 56.7.18 『九州陶磁文化館紹介』於久留米市石橋美術館土曜講座 (吉永)

行事予定

- 56.9.27 茶室開き
- 56.10.31 企画展「世界の現代陶芸展」
- ～12.6 この展覧会は、京都国立近代美術館の所蔵品を中心に、外国と日本の現代作品を国別・系統別に展示します。展示構成は、前衛的なオブジェ作家や陶彫家をはじめ、各国の伝統的な作家もふくめた作品群からなり、世界陶芸文化の多様性を一堂に紹介します。

利用案内

- 開 館 午前9時～午後4時30分 月曜休館
年末年始休館 12月28日～1月4日
- 観覧料 一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／
中・小学生50円(30円)／()内は20人以上の団体料金、但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
- 交 通 佐世保線有田駅下車徒歩15分